



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	被服学習における帰国生徒の実態
Author(s)	池崎, 喜美恵
Citation	東京学芸大学紀要 . 第 6 部門 , 産業技術・家政, 43: 187-193
Issue Date	1991-11
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2309/14539">http://hdl.handle.net/2309/14539</a>
Publisher	
Rights	

## 被服学習における帰国生徒の実態

池 崎 喜美恵

家庭科教育学\*

(1991年7月19日受理)

IKEZAKI, K.: Clothing Learning of Returned Students. Bull. Tokyo Gakugei Univ. Sect. 6, 43 : 187-193 (1991) ISSN 0387-8953

As a series of reports of research in homemaking education of returned students, this study investigated to what degree they helped to work clothing life, what they studied in clothing domain abroad and whether they understood it.

The results are as follows:

1. Half of the students had experiences in studying homemaking abroad. About 20% of boys and 40% of girls had practical learning of clothing overseas.
2. Boys didn't help their mother enough to button, sew up the rent and make something of with the aid of clothes, thread and needles.
3. The students didn't understand the contents of clothing learning enough, but especially they didn't comprehend about materials for clothing and skills of dressmaking.
4. Their dilute view of home life and insufficiency of experiences of learning will be influenced on studying homemaking when they came back to Japan. So the homemaking teacher needs to teach elementary knowledges and fundamental techniques for them. (in Japanese)

KEY WORDS: Homemaking Education, Returned Students, Clothing Domain, Junior High School, Clothing Life

*Department of Home Economics Education, Tokyo Gakugei University, Koganei-shi, Tokyo 184, Japan.*

### 1. 緒 言

社会・経済・文化の発展に伴い、わが国の国際化は著しく進展し、そのため、親の海外勤務

\* 東京学芸大学 (184 小金井市貫井北町4-1-1)

により一時的あるいは長期的に海外に滞在する子供たちが急増しつつある。したがって、帰国子女の問題は国際化の時代を迎えた日本の教育全体に関わる今日的課題ともいえる。また、経済企画庁が行った「国際化と国民意識」(昭和61年度国民生活選好度調査)の調査に示されているように、国際化という外向きに考える傾向があるが、内向きの国際化がともなわなければ相互交流としての円滑さを欠くことになる。内向きの流れをよくするためには、外国との様々な交流もあるが、やはり教育をとおしての外国情報の広がりや理解の深まりも要求されている。<sup>1)</sup>

ところで、帰国子女の中には、日本語を理解し、日本の生活に十分適応している者もいる一方、自分の頭の中では他国語で考え、日本語に直しながら文章を書く子供やいろいろな国の言葉が交錯し合い、会話や思考や書写などが十分できない子供など、個人差がみられる。また、帰国子女にとっては学校教育の中で語学力を保持しつつ、一日も早く日常生活に適応できることが要求されている。しかし、学校生活からドロップアウトしたり、日本の風土や生活に馴染めない子供もいるのが現状である。そこで、家庭生活を学習対象とする家庭科の特質に鑑みれば、家庭科教育で日本の衣食住などの生活に関する学習をし、基礎的な知識や技能を習得することは帰国子女教育の中で重要な役割を果たしうるといえよう。

本研究は、帰国子女の家庭科教育に関する研究の一貫として、家庭科の学習内容のうち被服領域における知識・理解の程度や衣生活における家庭での実践の様子および手縫いの基礎的技能的の習得状況について実態を調査した。そして、帰国子女の家庭科を指導するための資料とすることを目的とした。ただし、本報では、技能調査の結果については言及せず、稿を新たにしてお報告する。

## 2. 方 法

### 2. 1 調査時期、対象および方法

1988(昭和63)年11月～1989(平成元)年3月にかけて、東京都、神奈川県および京都府の帰国子女教育研究協力校、国公立私立中学校5校の帰国子女117名を対象に調査を実施した。調査対象者の内訳は、表1に示すとおりである。

調査の方法は、各校にアンケート用紙を持参し、帰国子女の言語能力などを配慮して実施した。学習経験の有無や実践の程度については選択技法により、知識・理解の程度については多肢選択法や再生法、真偽法、組み合わせ法などにより、学習内容については自由記述法により調査用紙を作成した。

表1 調査対象者

(人)

	1年	2年	3年	計
男	21	21	5	47
女	19	32	19	70
計	40	53	24	117

### 2. 2 調査内容

本稿で論述する調査の概要は、次のとおりである。

- 1) 帰国子女の属性(滞在国, 滞在年, 通学校)
- 2) 在外中における家庭科の学習経験や学習内容
- 3) 衣生活に関する実践度
- 4) 被服領域の学習内容の理解の程度

### 3. 結果および考察

#### 3. 1 回答者の属性

今回の調査で帰国子女が滞在していた国は、外務省の「海外在留邦人数調査統計」の地域別区分によると、北アメリカが56.4%と半数を占め、次いでヨーロッパ諸国、アジアの順である。外務省の調査<sup>2)</sup>と同じ傾向を示しており、これらの地域に日本経済が波及し、日本人が活躍していることを示している。

就学年齢以前を除いた渡航回数をみると、1回が84.6%であり、学年が上昇するにつれ必然的に渡航回数も多くなってきている。なかには、同一国内で数回転居した生徒もいた。

滞在年数では、2年～14年と広範囲に及び、誕生後数年間海外に滞在した後、日本に帰国し一時期を過ごし、再度海外で生活するという生活パターンを形成している生徒もおり、彼らの生育歴は多様性に富んでいた。

在外中に生徒たちが受けた教育についてみると、現地校通学者は78.0%、補習授業校通学者は49.2%、日本人学校通学者は39.4%であった。複数の教育機関へ通学する生徒が多くみられることは、帰国後の教育を配慮した親たちの教育への関心の高さが強く示されている。

#### 3. 2 在外中における家庭科学習の実態

##### 3. 2. 1 家庭科の学習経験

海外の学校教育で、家庭科を学習したかどうかを調査した結果を表2に示す。男子51.1%、女子55.7%と男女とも約半数が学習経験を有していた。学年別にみると、1年生52.5%、2年生56.6%、3年生50.0%であった。

学習経験のある生徒に学習内容を自由記述してもらったところ、次のような事項が例示された。

- ・被服に関する学習内容— 被服製作、基礎縫い、編物
- ・食物に関する学習内容— 栄養、調理実習（クッキー、ご飯と味噌汁、サラダ、現地の食物など）
- ・住居に関する学習内容— 掃除、空気の入れ替え、住みやすい住居
- ・家庭・保育に関する学習内容— 子供の成長、ベビーシッター
- ・その他— 買物、スーパーやレストランの映画の視聴

次に、家庭科の学習で印象に残っていることについて、自由記述により得られた意見を集約する。「時間を十分にかけることができた」「自由にできた」など、あまり時間的な制約もなく、また教師の指導上の干渉もなくのんびり学習していた状況が推察される。このような自由な学習体験を持つ帰国子女にとっては、日本での学習のように指導内容の過密により時間に追われ、製作や実習題材が限定されている指導には違和感を感じているであろう。また、「クッキーを焼いた、ピザを作った、現地の料理を作った」などの調理実習や「班で会食をした」という食物に関する学習が強く印象に残っているようである。その他、日本人学校通学者の「日本の学校と同じようなことを学習した」という意見もあり、一般生徒とあまり差のない学習経

表2 家庭科の学習経験

	人 (%)	
	男	女
ある	24 (51.1)	39 (55.7)
ない	23 (48.9)	30 (42.9)
NA	0 (0.0)	1 (1.4)

験を有する生徒もみられた。

### 3. 2. 2 被服領域に関する学習

製作学習を行ったかどうかを尋ねたところ、表3に示すように、男子76.6%、女子58.6%が未学習で、 $\chi^2$ 検定の結果、5%水準で有意差が認められた。学年別にみると、1年生72.5%、2年生66.0%、3年生54.2%が未学習であった。このことは、被服製作に関する学習経験が少なく、学校教育段階における製作技術の習得が不十分であるともいえる。そして、滞在国によっては実習のための材料の入手が困難であったり、施設・設備が不足している地域もあるなど憂慮すべき実態が垣間見られた。

製作した作品例として袋、エプロン、クッション、針さし、メガネケース、スモック、スカート、Tシャツ、サマードレス、ぬいぐるみ、などが例示された。

図らずも、被服製作の学習経験で「ミシンは使わなかった」など、日本の被服学習では当然のことと思われることが学習されていなかったり、日本では個人の持ち物として自己管理をさせているが、「裁縫道具は学校で貸してくれた」という教科指導の実状を示しているコメントがみられた。また、外国の学校には家庭科室があったかどうかを尋ねたところ、彼らが通っていた学校のうち約56%には施設としての家庭科教室があり、約42%にはなかった。

以上のことから、帰国してから初めて針や糸を持って製作学習をする生徒も多いため、基礎的な知識や技術の習得が不足しているといえる。また、学習環境や日本の家庭科教育事情とは異なった体験をしている生徒もおり、授業の進め方に戸惑いを感じているであろうことが推察される。

### 3. 3 帰国後の家庭科学習の実態

#### 3. 3. 1 被服学習に対する意識

被服学習の好き嫌いをみると、表4に示すように「好き、少し好き」を合わせると男子17.0%、女子57.1%が好きと回答していた。学年別にみると1年生40.0%、2年生37.7%、3年生50.0%が好きと回答していた。男女間には1%水準で、学年間では5%水準で有意差が認められた。つまり、女子の方が家庭科に好感を持ち、学年が上昇するにつれ被服学習を嫌う傾向がみられる。しかし、3年生にこの学習を好む生徒が比較的多いのは、調査対象者の男子が僅少で女子が多かったことが理由として考えられる。

筆者が1987(昭和62)年に行った帰国子女を対象とした調査<sup>3)</sup>では、日本の家庭科の授業を好きかどうかを調査した結果、「好き・少し好き」と回答した中学生は約51%で、好きな理由として、8項目の中から複数回答してもらったところ「実習(実際に物を縫ったり、料理した

表3 被服製作の学習経験

	人 (%)	
	男	女
ある	10 (21.3)	28 (40.0)
ない	36 (76.6)	41 (58.6)
NA	1 (2.1)	1 (1.4)

$\chi^2$  検定の結果 \* 5%水準で有意差あり  
\*\* 1%水準で有意差あり  
以下 同様

表4 被服学習の好き嫌いの程度

	人 (%)	
	男	女
好 き	0 (0.0)	11 (15.7)
少 し 好 き	8 (17.0)	29 (41.4)
嫌 い	20 (42.6)	13 (18.6)
ど ち ら と も い え な い	18 (38.3)	17 (24.3)
N. A.	1 (2.1)	0 (0.0)

りする授業)が多くて楽しい」が約62%、「料理するのが好き」が約57%、「物を縫ったり、作ったりするのが好き」が約49%であった。一方、「あまり好きでない・嫌い」と回答した生徒は約26%で、理由として、8項目の中から複数回答してもらったところ、「授業がつまらない」が約51%、「物を縫ったり、作ったりするのが嫌い」が約33%であった。物を製作することの好き嫌いは、家庭科学習の好き嫌いの大きな要因であり、個人差も大きいといえる。

### 3. 3. 2 衣生活に関する実践の程度

衣生活における役割遂行の程度について、「ボタン付け」「ほころび直し」「針や布を使った製作」の3項目について調査した。表5に示すように、「ボタン付け」では男子4.3%、女子28.6%が自分の衣服のボタン付けを「よくする」と回答している。「ほころび直し」では男子4.3%、女子14.3%がスカートやズボンのすそあげや縫い目がほつれたのを直すことを「よくする」と回答し、男子89.3%、女45.7%が「しない」と回答している。また、「製作」では他の項目より実践率は低く、男子93.7%、女子34.3%が「しない」と回答している。学年別にみると、「ボタン付け」は全学年とも60~70%が遂行しており、「ほころび直し」は3年生の半数以上が分担し、他学年より遂行率が高い。「製作」に関しては、1・2年生は約37%、3年生は約54%が実施し、他の項目と比較すると遂行率は低い傾向が示された。

日本家庭科教育学会が実施した全国調査<sup>4)</sup>と比較すると、洗濯、アイロンがけ、製作、つくろいなど衣生活に関する家事をどの程度分担しているかでは、全体的にみると「よくする」は男子4.1%、女子12.4%であった。また、中学2年生の男子は「よくする」が2.5%、女子11.2%、「時々する」が男子24.4%、女子72.1%であり、男子約27%、女子約83%が衣生活におけるなんらかの家事分担を行っているといえる。本調査で得られた「ボタンつけ」に関する数値とは類似しているが、他の項目に関しては一般生徒と比較すると遂行率は低い傾向がみられた。

したがって、衣生活に関しては帰国生徒はあまり家庭で実践していないといえる。

### 3. 4 被服領域に関する理解の程度

小学校5・6年生の家庭科や中学校1年生の家庭科で学習する衣服の着方、被服材料、被服管理、ミシン、裁縫用具、製作技術などに関する理解の程度について調査した。全質問数に対

表5 衣生活における実践の程度

#### ① ボタン付けの実践状況

人 (%)

	男	女
よくする	2 ( 4.3)	20 (28.6)
時々する	14 (29.8)	42 (60.0)
しない	30 (63.8)	8 (11.4)
N. A.	1 ( 2.1)	0 ( 0.0)

\*\*\*

#### ② ほころび直しの実践状況

人 (%)

	男	女
よくする	2 ( 4.3)	10 (14.3)
時々する	2 ( 4.3)	28 (40.0)
しない	42 (89.3)	32 (45.7)
N. A.	1 ( 2.1)	0 ( 0.0)

\*\*\*

#### ③ 製作に関する実践状況

人 (%)

	男	女
よくする	1 ( 2.1)	9 (12.9)
時々する	1 ( 2.1)	37 (52.8)
しない	44 (93.7)	24 (34.3)
N. A.	1 ( 2.1)	0 ( 0.0)

\*\*\*

する正解数の比率を正答率として算出すると、図1に示す結果が得られた。男子の平均正答率は35.9%，女子の平均正答率は52.7%で、女子の方が理解の程度は高かった。なかでも1年生女子の数値は他学年の男女に比べ高く、家庭科学習の記憶が鮮明であるといえよう。また、外国での家庭科学習の経験の有無と理解の程度の相関をみると、学習経験のある男子生徒の正答率は38.8%，学習経験のない生徒の正答率は31.9%で男子においては学習経験と理解の程度との間には関係がみられた。

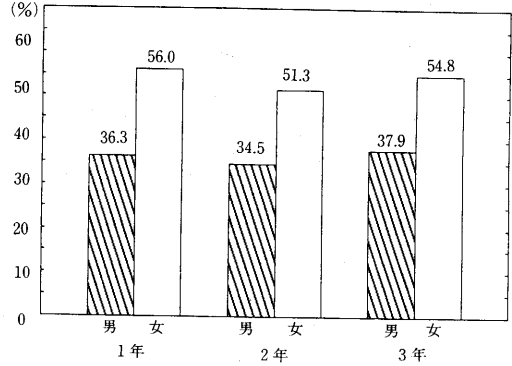


図1 正答率

しかし、女子の場合は学習経験のある生徒の正答率は48.7%，学習経験のない生徒の正答率は50.9%であり、必ずしも学習経験が理解の程度に影響しているとは言い難い。

次に、各項目について詳細にみると、衣服の着方については男子の平均正答率は91%，女子は88.6%で高得点を示していた。これは、文章完成法で作問したため、回答し易かったことが考えられる。繊維の性質については、男子約25%，女子約27%で両者とも正答率は低く、被服材料については十分理解していないといえる。また、取扱い絵表示や洗剤や洗濯などの被服整理に関しては男子の平均正答率約42%，女子約51%で、やや女子の方が理解の程度が高い傾向がみられた。

さらに、ミシンの上糸のかけ方や故障原因については男子約31%，女子約43%，裁縫用具については男子約35%，女子約61%の正答率であった。手縫いの基礎や縫いしろの始末などの製作技能については男子約22%，女子約51%と両者間には理解の程度に差がみられた。

以上のことから、被服学習における被服材料や製作技能に関する男子の理解度の低さが顕著であった。また、女子も約半数しか理解しておらず、基礎的な知識の欠如を指摘することができた。したがって、帰国子女の家庭科指導では基礎的な学習事項を的確にとらえて、個人差に応じた指導をする必要がある。

## 5. 要 約

帰国子女の衣生活における実践度および被服学習に関する学習経験や知識・理解の程度に関する調査から、次のような知見が得られた。

在外中、約半数の生徒は家庭科を学習しており、主に、被服領域の製作や食物領域の栄養や調理実習などを印象に残っている学習内容として挙げていた。被服実習については、男子約20%，女子40%しか学習経験を持たず、未学習者が比較的多かった。このことは、帰国後初めて製作学習をする生徒もいるため、基礎的な知識や技術が不足していることが指導上の問題点として挙げられる。

被服学習に対して、男子17%，女子約57%が興味・関心を示しており、性差が認められた。また、衣生活における実践状況でも男子の役割遂行の低さが顕著であり、知識や技能の定着度にも影響しているとも考えられる。さらに、被服領域の理解度については男子の平均正答率約36%，女子の平均正答率約53%で理解の低迷化が表明された。

以上の調査結果から、家庭生活観の希薄化や学習経験の有無などが、帰国後の家庭科学習に及ぼす影響は大きいと思われる。したがって、家庭科に対する教科観や学習意欲にも関わるた

め、生徒の実態を充分把握して指導にあたる必要がある。

本調査にご協力下さいました、帰国子女教育研究協力校の教師および生徒の皆様に深く感謝いたします。

本研究は、昭和63年度科学研究費（奨励研究 A）の交付を受けて行った。

#### 引用文献

- 1) 石附実 鈴木正幸 異文化接触と日本の教育⑧ 現代日本の教育と国際化 福村出版 p. 24 (1988)
- 2) 文部省教育助成局財務課海外子女教育室 海外子女教育の現状 p. 5 (1989)
- 3) 池崎喜美恵 帰国子女の家庭科教育に関する研究 日本家庭科教育学会第30回大会研究発表講演要旨 p. 27 (1987)
- 4) 日本家庭科教育学会 児童・生徒の発達と家庭科教育(1)－現代の子どもたちは家庭生活をどう見ているか－ 家政教育社 pp. 88～89 (1984)